

卷頭言

自分自身にできることは

京都保健会吉祥院病院 大松 慶子

今年も年末年始がやってきた。世間の楽しげな雰囲気の中、ふと思う。以前勤めていた専門学校を退学した人達は元気にしているだろうか。

全国的に作業療法学科の定員割れがささやかれる中、オープンキャンパスでは、来てくれた人はほぼ全員に入学を勧め、定員充足率を見ながら入試の合格を出す現実がある。

入学時点から卒業が危ぶまれる人が毎年1年生にいる。そのような学生には、教員が懸命に支援する。変わってくる人もいるが、難しいままの学生ももちろんいる。彼等の入学の動機は、多くが、資格が得られる、楽しそう、簡単に入れるなどであり、中には、勉強は嫌いだけど作業ならできそうと思った人もいる。大人に強く勧められた場合もある。せっかく入ったのだから、もう少し頑張れば、もう少し頑張れば…と周囲に発破を掛けられ、本人は渋々学生を続ける。決定を先伸ばしにし、気づけば2年、3年と在学することになる。退学を決めた時点では、大切な時間と、人生をやり直すための資産を数百万円使ってしまっている。「先生、○○さん、商店街でティッシュ配ってましたよ」、「□□君、やること無いから、1日、近所をぶらぶらしてます」と聞いた。中には、家から出られず、閉じこもる人もいるようだった。人生に無駄な事は無いとは昔からよく言われるが、入学時に適切に選抜できなかった責任を感じた。

以前、専門学校経営者の方から学校経営について、「生きて行くのが難しい時代に、若い人達に資格を取らせて生活の手段を与えていた。素晴らしい社会貢献だ」とのお話しをお聞きした。学校にとっては、希望する人には入学してもらい、その人達がサービスの対象者であって、対象者の希望を最大限かなえることが仕事である。そのために、分かり易い授業、勉強したくなる動機づけ、国家試験合格へ向けての様々な対応をすべきなのだなということが理解できた。しかし、これは、学科の教員が目指す、作業療法対象者へのより良いサービスができる質の高い作業療法士を育てることとは相反する面がある。何より、入学時にもう少ししっかり選んでいれば、人生の選択に躊躇人達を減らすことができるのではないか。作業療法士の養成校で、作業療法が必要な人を生み出している現実があるのでないだろうか。

少子化の中で、養成校は増え続けている。変えることが難しいと考えられるこの状況に対し、学校を離れた一人の作業療法士として何ができるのか、答えを探していきたい。